

「言葉が通じる」

2016年02月16日

使徒言行録 2章 5節～13節。さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あっけにとられてしまった。人々は驚き怪しんで言った。「話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。わたしたちの中には、パルティア、メディア、エラムからの者があり、また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、フリギア、パンフィリア、エジプト、キレネに接するリビア地方などに住む者もいる。また、ローマから来て滞在中の者、ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もおり、クレタ、アラビアから来た者もいるのに、彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」人々は皆驚き、とまどい、「いったい、これはどういうことなのか」と互いに言った。しかし、「あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ」と言って、あざける者もいた。

五旬祭の日、使徒たちと仲間たちが集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、家中に響いた。この日、エルサレムに巡礼に来ていたユダヤ教徒たちは物音を聞いて、大勢集まって来た。すると、使徒たちが聖霊に満たされ、他の国々の言葉で語っていた。集まった人々は自分の故郷の言葉を聞き、あっけにとられた。彼らは驚き怪しみ「話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか」と言い合った。集まった人々は、ユダヤを中心にして東方のパルティア、メディア、エラム、メソポタミア、北西のカパドキア、ポントス、アジア、フルギア、パンフィリア、南西のエジプト、キレネ、リビア、当時の都ローマ、西方の海洋クレタ、東方の内陸アラビアなどから来ていた散らされたユダヤ人（ディアスポラ）たちであった。もちろん、パレスチナに住むユダヤ人たちもいれば、異教徒からユダヤ教に改宗した人々もいた。

彼らは皆、自分が生活している国、地方の言葉を使っていた。その彼らは自分の故郷の言葉で、使徒たちが話すのを聞いたということは、使徒たちの話の内容を理解したということである。理解した内容は「彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っている」ことであった。使徒たちが語る神の偉大な業・福音を受け止めることができた。言葉が通じた。即ち、心が通じ合ったのである。

多言語を理解し合った奇跡は下記のような出来事であろう。ペトロが代表して語った説教が次節の14節から記されているが、結論は36節の「だから、イスラエルの全家は、はっきり知らなくてはなりません。あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさったのです」である。集まった多言語の人々は、十字架で殺されたイエスを、神が復活させ、主、メシアとされたことを信じた。ナザレのイエスを主キリストと信じ、共に仰ぐ時、愛されている人間として互いに受け入れ合う。言葉を理解し、心が通じ合う信仰共同体、それが、最初に生まれたエルサレム教会であった。主イエスを仰ぎ、共にあることを喜ぶ人々がいたが、反面、批判的に「あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ」と嘲る者もいた。教会の誕生は聖霊によって、イエスをキリストと信じる信仰がもたらした奇跡であった。この奇跡は今日も続いている。